

毛皮

— 身をまもる技と心 —

平成15年2月4日(火)
～3月23日(日)

寒い冬です。
暖かい毛皮にふれてみませんか?

<関連事業>

●2月16日(日) 10:00～12:30

(当館講堂ならびに展示室)

講座「レザーとファー(革と毛皮の話)」

講師：森下 雅代 氏 (森下造形研究室主宰・
日本レザークラフト協会副会長)

齋藤 玲子 (当館学芸員)

●2月16日(日) 14:00～16:00

(当館講堂)

講習会「革で動物をつくろう」(定員40名)

講師：森下 雅代 氏

* 水と絵の具などを使いますので、エプロンとタオルをご持参ください。
* 講座・講習会のうち、片方のみの参加もできますが、ぜひあわせてご参加ください。その際、昼食は各自でご用意ください。

参加無料。事前に電話でお申し込みください。

休館日／月曜日
観覧料／無料

写真：背景／トナカイ毛皮製ズボン (コリヤーク、カムチャツカ／1990年代)
人形 (イヌイト、アラスカ／エセル・ワシントン作・1940年頃)
いずれも当館蔵

協力：斜里町立知床博物館、端野町立歴史民俗資料館、北網圏北見文化センター、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園、
(有)アトリエどら猫、(株)遠軽毛皮、原ひろ子氏、寺田弘氏、近藤敬治氏、井上敏昭氏、スチュアート ヘンリ氏、竹之内一昭氏

* 常設展示観覧料：一般300円(240円)、大学生100円(80円)／小中高生は無料／()内は10名以上の団体料金

〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1

(天都山・道立オホーツク公園内)

Tel 0152-45-3888 / Fax 0152-45-3889



北海道立北方民族博物館

Hokkaido Museum of Northern Peoples

企画展 毛皮 —身をまもる技と心—

寒冷な北方地域で生活するためには、動物の皮は不可欠です。たとえば、毛皮の衣類は寒さやけがなどから身体を保護するだけでなく、魔除けなどの意味も備えています。この企画展では、衣類を中心に北方の先住民が毛皮や皮革をどのように利用してきたのか、その歴史と技術から精神世界までを概観します。また、近現代の北海道の毛皮利用や皮革製造技術についても紹介します。



北方の獣と毛皮

北方地域の動物は寒冷な気候に適応し、保温に優れた毛皮をもっています。伝統的な生活のなかで最もよく使われたのは、トナカイなどのシカ類とアザラシの毛皮です。このほかイヌやウサギも多く利用されてきました。

身をまもる技と心

毛皮の質は動物の種類や年齢・部位・季節などによって異なるため、目的に応じて使い分けがされてきました。皮の腐敗を防ぎ、柔らかくするための鞣し^{なめ}の方法、防寒性や防水性を高めるための形や縫製方法などには、先住民の巧みな技を見ることができます。また、衣類をはじめとする毛皮製品には、動物への敬意を表し獲物に恵まれることを願ったものや、持つ人の性別や社会的地位を示す装飾が施されたり、病魔などを寄せつけないための精神的な意味が込められたものがあります。

アザラシ皮製の子ども用衣類（イヌイト、カナダ／1975年 当館蔵）

毛皮交易と先住民の歴史

17・18世紀頃からのシベリア・アラスカ・カナダ極北部への欧米人の進出は、その目的がクロテンやラッコ、ビーバーなどの毛皮の獲得であったことはよく知られています。ヨーロッパや中国での良質な毛皮の需要を背景にした交易は、先住民を毛皮獣の猟に駆り出し、代わりにタバコなどの嗜好品や金属器・布製品といった多くの外来品をもたらすなど、その文化に大きな影響を与えるものでした。



皮鞣しをする女性（エベン、カムチャツカ）／1998年・渡部裕撮影



北海道の毛皮利用

明治の開拓期以降、北海道の移住者の間では、冬山造材や馬追いの作業着として、防寒用の帽子・手袋・袖無し（ベスト）の裏打ちや、尻皮などに毛皮が利用されてきました。大正から昭和初期には、マントの衿や雪下駄の縁取りにオットセイなどの毛皮が用いられるようになり、ファッションとしても普及していったようです。

袖無し（北海道斜里町／昭和初期 斜里町立知床博物館蔵）

<期間中のもよおし>

「かんじきで歩こう」 講師：当館学芸員

● 3月1日(土) 10:00～11:30 会場：当館講堂集合、屋外博物館クラブ；小・中学生とその保護者対象

● 3月2日(日) 10:00～11:30 会場：当館講堂集合、屋外講習会；一般対象

*参加は無料です。事前に電話でお申し込みください。

